



町民文芸

只見短歌会 令和五年五月詠草

施設より帰りて眺む山の家我を待つがに福寿草盛り
馬場 八智

新学期少数なれど小学生元氣可愛さ心のみぬ
関谷登美子

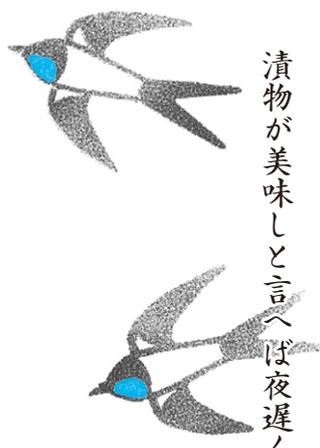
春たけなわ草勢ひて花々の混じりて心満ちて癒さる
目黒 富子

初節句迎へし息子に袴着せ短き手足に余る袖裾
立花 奏音

古い母の納骨済みても仏壇を訪れくる人の多し
新国由紀子

「また来てね」今度またね」と手を振りて別れて来しが訃報の届く
渡部ヨリ子

漬物が美味しと言へば夜遅く娘が野菜を刻む音する
故 新国 洋子（遺作）



只見俳句会 五月定例会

一本の蕨小藪に伸びいたり
しつらいし点前畳や緑さす
礼

やっと春戸を開け放ち風よ来い
村はずれ桜一本満開に
修 一

汗拭い拉麺食らう屋台かな
夏浅し清張訪ねて小倉かな
信

新生活地図を頼りの親放れ
晴れあがり空のまぶしき青柳
都

朝朗土手の桜の色づきぬ
山頂に群れ登るごとく樵若葉
真理子

日高俊平太 指導

春光や欠伸のうつる子らの列
春風や屋根根見下ろして丘に立つ
紺 青

ものの芽や年々減るわ植木鉢
青空よ初蟬の声届いたか
恒 夫

